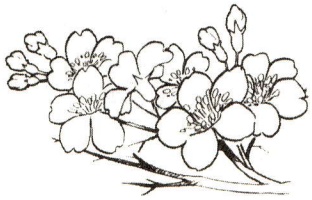
環境パートナーシップちば

だより

— つながれ ひろがれ —

Vol.12

編　集　環境パートナーシップちば
代　表　横山清美
事務局　千葉市中央区中央港1-11-1
(財)千葉県環境財団 環境学習推進室内
電　話　043-246-2180
FAX　043-246-6969



新ミレニアムへ論議はずむ

——新年懇話会開催——

副代表　川原啓佑

年明けの日曜午後、環境パートナーシップちばの運営委員会メンバーに各部会スタッフも加わり、新年懇話会が開かれました。

やりっぱなしではなく、Plan（計画）→Do（実施）→See（評価）のサイクルをしっかりと廻し、特にふり返りの「評価」を新年度の活動向上へつなげようというものです。

まず論議は、当会の目的Ⓐ環境市民のゆるやかな連帯、Ⓑ行政、専門家（企業を含む）とのパートナーシップ活動、の達成状況から始りました。この3年間でⒶは原型としてはほぼ達成できたのではないか、またⒷもその端緒は開けたのではとの意見がほぼ賛同されました。Ⓑについては特にこの1年①県の温暖化防止計画委員会へ、全県環境市民代表として横山代表が参画を開始したこと②県の環境行事（メッセ、シンポ、プラザ祭り）の中核部隊となり、その役割が今後も期待されていること③本会報への県環境部登場など、パートナーシップの基盤作りが進みました。また

この1年の上記Aの推進としては、タイムリーなテーマで会員学習の場を提供できたこと、グリーンコンシューマーネットなど全国組織との連繋を深めたetc…の成果が確認されました。一方反省点としては、序論段階の勉強会パターンから具体活動へ前進することが必要との指摘や、100をこえる県下環境団体の過半とはいえ組織拡大が今一つ。テーマが拡がり過ぎ？末端でのパートナーシップ、情報発信、市民参加盛上げ不足等々今後の課題で話が弾みました。

最後に、身近なパートナーである環境財団の伊豆室長から、今後の共催事業などサポート継続について力強い口添えも戴けました。

今年は新しいミレニアムの年。私たちも「市民の連帯づくり」を脱し、連帯に立脚した「行政、専門家との環境協働」へ、進める節目の年です。そのためにも、スタッフを広く募って力を集めようとの結論となりました。

コラム

パートナーシップ？

八千代ホタルフォーラム
加藤　賢三

第4回八千代環境フォーラムで、“パートナーシップでまちづくり”を企画している。今回は、千葉まちづくりサポートセンターで活躍されている小坂雄二氏に、パートナーシップの理論と実施について話していただく。皆様のご参加をお願いして、パートナーシップってなに？をもう一度考えて頂ければ幸いである。

しばしば、「ホタルからなぜ“まちづくり”につながるの？」と聞かれることがある。ホタルを通じて環境を眺めていると、「ルールなき“まちづくり”では、環境保護は出来ないから」と答えている。市民と行政のパートナーシップ実践編として、現在“ほたるの里づくり”を教材（？）に、グラウンドワーク方式の活動をしているつもりである。これは、大きい声では言えないが、しなやかに、根気を養える最適なトレーニングと考えている。

第3回 エコツアー

2月18日(金)、北風冬晴れの一日、エコツアーを実施しました。総勢44人のご参加を頂き、車中は参加者同士の意見交換の場となって、文字通り「パートナーシップ」の面目躍如たるものがありました。何日かかっても見学しきれない国立環境研究所に驚き、筑波実験植物園の春を期待して帰ってまいりました。

環境研究所を訪ねて

千葉市在住　山田　寛治

エコツアーに初めて参加させていただいて、つくばの環境研究所を訪問しました。

テレビや新聞で毎日のように報道されている毒物ダイオキシンが、印象に残りました。化学物質主任研究官の先生のお話によると、ダイオキシンはゴミ焼却から発生するのが最も多いとのことでした。体内に蓄積される量も、一時所沢の野菜が騒がれたが、それよりも毎日食べる魚介類から取り込む量のほうが多いということがショックでした。

ダイオキシンは、生殖異常など将来世代への影響が大きいので、良く調べなければならないが、現状では自動車の排気ガスによる大気汚染のほうが、はるかにヒトの健康を蝕んでいるとのことでした。

ダイオキシンの元凶であるゴミは、毎日私たちが出しているものだし、また私たちの生活を支えているクルマ・バス・トラックが大気を汚しているのです。

つまり、環境を悪くしているのは私たち自身なのだといろいろなことを、今更ながら痛感しました。これからも、私たちの環境を良くするため、一層努力せねばと思いました。

午後は、あこがれのつくば実験植物園を見学しました。園内の熱帯植物温室を楽しく散策しました。“板根”や“しめ殺しの木”などの屋外標本に感激しました。春になったら、ぜひもう一度ゆっくり見学したいと思っております。

楽しいバスツアーの一日でした。バスの道中を、盛り上げてくださった世話役のみなさまに感謝しています。

国立環境研究所の所見

’97エコリーダーちばの会　柘植　耕作

環境研究所の多くの研究テーマの中から、昨今話題の2テーマに絞り勉強させて頂いた。一行44名2班に別れ、まず遺伝子組換え動植物の環境変化への適応研究の場“環境遺伝子工学実験棟”を訪問。

さっそく研究内容の概説を受けたが、その中で沖縄の西表島に生息しているイリオモテヤマネコの遺伝子分析から遺伝的障害が起きやすい希少動物であることの確認ができたこと、絶滅に瀕している野生動物を遺伝子組換え技術で保存する研究に大変興味をおぼえた。実験室内では【葉たばこ】をモデルに排ガスに強い植物の改善研究と熱帯魚の【ゼブラフィッシュ】を使い水中環境に適応できる実験の現場を見学できた。専門用語も多く記憶にとどめるのに苦労した。次は、基盤研究部門の集まる“研究本館Ⅲ棟二階の化学物質管理区域”内化学環境部見学ブースにお邪魔した。いま話題の【ダイオキシン類】の発生メカからその影響・防止対策につき説明され、みな食い入るような眼差しで聞いた・・・。説明後の活発な質疑に研究員も一瞬ひるむ場面あり、真剣さゆえに研究員が小声で『ダイオキシンは既に10年程まえから分かっていました。発ガン物質では自動車排ガスのほうが問題はより深刻です、ダイオキシン類が直接原因で亡くなった人はまだ一人もおりませんから』一同あぜん。昼食後、環境問題のビデオを見たのち実用化を目指す‘ソーラーカーの見学・試乗’をすませ研究所を後にした。国立筑波実験植物園により小一時間各自自由散策を楽しんだ後バスの人となり帰路につく、途中16号線の跨線橋上でみた夕景の素晴らしさ《この景色を我々の子孫にも伝えなければ》と一人誓いつつ、帰宅を急ぐ人で混雑する稲毛駅前に無事到着。

計画実行の関係者ならびにツアー参加の皆さん有難うございました。この続編を楽しみに・・・。

インターネットの可能性を求めて

学校ビオトープ・ネットワーク副会長　平山　明彦

はじめまして、あきちゃんです。環境パートナーシップちばに個人会員として入会させていただきました。今後ともよろしくお願いいたします。

藤前干潟ゴミ処理場埋め立て計画を断念に持ち込むことになった要因は、さまざまに分析されていますが、インターネットもその役割を担ったものと評価されています。（松浦さと子編「そして干潟は残った インターネットとＮＰＯの果たした役割」リベルタ出版）インターネットはマスメディアの報道に左右されない、情報の開かれた民主主義、市民の立場に立つ報道やメディア、都市計画への市民参加とさまざまな情報社会を築くものと確信しております。情報公開の結果、さまざまな専門家および市民の協働によって、本来のアセスメントがおこなわれました。

また、学校でビオトープつくりを通した、心の教育・環境教育・まちづくりの実践をネットワーク化するためにＮＰＯ法人“学校ビオトープ・ネットワーク”を設立しました。これにもメーリングリストによる情報交換、電子メールによる情報の交換が大きな役割を担いました。

私は、インターネットの可能性を信じ、いくつかのホームページ、メーリングリストを管理・運営しています。大げさなものではなく、１日15分程度、お酒を飲みながら、あるいは布団の中で…とパソコンと遊んでいます。

パソコンを所有しているが、インターネットへの接続ができない、メールの使い方が解らない等がありましたらご連絡ください。あきちゃんが飛んで行きます。

連絡先
〒299－0114　千葉県市原市泉台４－６－１
tel&fax　0436－66－5465
e-mail hirayama@mx1.alpha-web.ne.jp

たかが10年されど10年

リサイクルグループ「かもめ」　代表　永島　輝代

1989年９月下旬にスタートした私達の活動は、昨年の９月を以って10周年を迎えた。物事の「きっかけ」なんて意外にたわいもない事が多い。ためらい始めるとなかなか踏切れなくなる。たまたま言い出したのがパワフルおばさんだったから、メンバーも大変だったろう……と思う。時に’89年は地球環境サミットの開かれる前年で、メディアと言うメディアは、環境問題のオンパレード、リサイクル活動に踏み切るには、誠にタイムリーであったと言えよう。

PTAや子ども会が資金源として、続けていた活動は、還元金ダウンとともに中止され、ステーションにはたちまちゴミの量が増え出す。地区の主婦連に呼び掛け、回収業者を捜し、手づくりの回覧板で情報を流し、初めての古紙リサイクルをクリアした。22人の主婦連は、900kg２，900円の還元金を再生トイレットペーパーにかえて老人ホームへカンパすることにして、一寸いい気分。しかしたまるゴミ始末しなくては、いい気分になった意味がない。かくして組織化して、定期回収の方向に決め、メインスタッフを一本釣りし、ミニコミを発行して情報啓発をアピール、参加メンバーを増やす作戦を展開した。参加者が拡がるのに、２年はかからなかった。裏を返せば紙ゴミのやり場に、多くの人が困っていたということである。

現在町の大半の紙ゴミを引き受け、更にスーパー・学校・事業所への呼び掛けは拡がり、協力参加者はますます増えて行った。ゴミ収集に市民ボランティアパワーだけでいいのかと言えば、やはり限界はあろう。４月から施行、タイムリミットで容器包装リサイクル法の完全実施を切望したい。

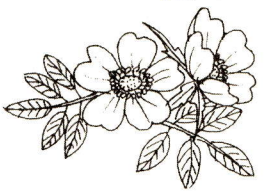
リサイクル活動を進めて来たなかで苦労したのが、行政とのかかわり合いである。当初町行政に古紙リサイクルの受け皿は全くなく、ボランティア活動への理解もさだかではなかった。足を運び、頭を下げ、市民がモクモクと継続する熱意でクリアするしかないかと思って動いたが、これではあまりにも時間とエネルギーがかかり過ぎる。嫌われる事を覚悟で、ときには積極的な行動も必要なのである。それには私達が自信の持てるパワーを、蓄えておかねばならない。されど10年、一段一段登って来た階段に、行政の対応も理解もずい分変ってきている。ダイオキシンショックを経期に、ゴミ行政の変革せざるを得ない現実もあったと言えよう。

さてわずかながらの還元金と行政の助成金が、活動の経費をまかなうのであるが、活動が活発化するととても足りない。企業や県行政の補助制度は、大いに有効利用させていただいている。子ども達の環境学習には、最も力を入れてきた。

たかが10年の間に、フロンガス、ダイオキシン、ＣＯ２環境ホルモン……次々と激しく起こる問題に、右往左往させられてきた。全て人間の暮しのなせるわざと思うと、罪深さも深刻なものと言える。足元だけではとても間に合わぬとはいえ、市民の出来ることはやるっきゃないのだ。

蛇足になるが重度の障害を持つ私にとって、今環境問題への取り組みは、まさに「生きる」事へのチャレンジと考える。10年支え続けてくれた「かもめ」の仲間達に感謝したい。これからもモクモクと頑張りましょう！

連絡先：御宿町浜２８５
TEL･FAX　0470－68－3529



「楽しい里山保全活動」にご参加を！

広報部　山口　由富子

「楽しい農夫を演出し、第２の故郷として田舎暮らしを！」というキャッチフレーズに魅せられて、冬晴れの２月、久留里線終点上総亀山駅にほど近い、「自然学園・太陽国際村」を訪問した。ここの理事長内山和男氏は、環境パートナーシップちばの当初よりの会員であり、住まいは東京飯田橋に事務所を構えているが、週末の３日間は君津市にあるこの自然学園で生活し、自然と触れ合うことにより「人間蘇生の場」としての認識を深め、多くの方々にも施設利用の提供を呼びかけている。

春は、種まき、椎茸の菌打ち、タケノコ・山菜採り。夏は川狩り、盆踊り、湖上祭。秋は、モミジ狩り、虫の音交響曲、キノコ狩り。冬は囲炉裏で鍋料理と、自然の恵みを充分にいただいた生活は、体力増強に、ストレス解消に、申し分のない効果を発揮しているという。

内山氏がこの地に移り住んで、はや15年が過ぎようとしているが、初めからこうした快適な生活が楽しめたわけではなかったそうだ。それは、一部の地元民とのあいだの摩擦のため、道路封鎖をされるなどさまざまな障害に悩まされたと言う。しかし、地道な農村活動と近隣とのさりげない付き合いの結果、働き手を失った地主たちから、「地域振興のために、うちの山を使ってほしい。」との要請を受けるまでになり、その広さは、現在の５万坪に加え倍の10万坪になろうとしている。

内山氏は、地主と都会人とを結び付けることにより、里山保全と自然の恩恵を享受できる「楽しい里山保全活動」を展開しようと大々的な呼びかけを始めたのである。

大小さまざまなトラクターで耕された畑は、ジャガイモの植付けを待って黒々とした土がよみがえり、その隣りにはさまざまなハーブが霜にもめげず、頑張っている。ここに集う人たちの楽しげなおしゃべりが聞こえてくるようだ。内山氏は「あなたの好きなときに、好きなだけ、いつでも自由に来て楽しむ活動に、ぜひご参加を！」と呼びかけている。

連絡先：自然学園・太陽国際村
電話　0439（39）3307　FAX　0439（39）2910
同上　事務局
電話　03（3237）8051　FAX　03（3237）8041

「環境パートナーシップちば」　平成12年度 総会のお知らせ

環境市民の連帯で行政等のパートナーシップによる環境向上を目的に誕生した当会も、会員の皆様のご理解とご協力をいただきまして、３年目を終了いたす運びとなりました。

今年度は、フォーラム・エコツアー・情報誌「だより」発行・「環境シンポジウムちば会議」や「エコメッセ」への参画などの事業を企画運営してまいりました。

総会で各議題を皆様に審議していただきたく、ご多忙とは存じますが、万障お繰り合わせの上、多数のご出席をお願い申し上げます。

なお、応募団体の「事例８分間スピーチ」や、なごやかな情報交換の場として交流会も予定しております。

日　時：４月１５日（土）
　　13:30 ～ 16:30
会　場：千葉市美術館　講堂（11F）
千葉市中央区中央３－10－８
TEL：043－221－2311
（詳細のご案内は、別途送付）

〈環境パートナーシップちば〉

入会申込書（該当するところを○で囲んで下さい）

会の趣旨に賛同し（個人、団体、賛助会員として）
会費を添えて入会します

氏　　名		入会月日	
住　　所	〒		
T　E　L		F　A　X	
申込み先	TEL 043-246-2180　FAX 043-246-6969		
年　会　費	個人１，000円　団体２，000円　賛助会員５，000円		
会費納入先	郵便振替口座　00160-9-401872　環境パートナーシップちば		

編集後記

ヘドロに悩む浜名湖の水質を改善しようと、湖岸の私立オイスカ高校がマングローブの北限に挑んで植林している。根付くと土壌が浄化され、落ち葉を食べるカニなどが集まり生態系が豊かになる一方、寒さに弱く在来種に害を及ぼすほどには広がらない。現在は７割程が成長し、越冬という難しい時期を乗り越えようとしている。

将来は、干潟として子どもたちが遊べ、観察学習できる空間にしたいとのこと。ケナフに続いて、各地でマングローブの活用が広がるのではと期待される。

広報部長　縣　和子

この「環境パートナーシップちば」だよりは、再生紙を使用しています。